

足元の合理主義（1）

——ダーウィンの「結婚損得表」——

進化論の父チャールズ・ダーウィンは、姉のキャロラインが結婚したこともあり、28歳頃、自分もそろそろ結婚すべきかどうかを真剣に考え始めた。

ダーウィンが最も恐れたのは、結婚生活に必然的に伴う親類縁者との付き合いや社交に伴う時間の浪費だった。結婚すれば一生ハタラキバチのように働き続けなければならない。5年間に及んだビーグル号の航海から帰ったばかりのダーウィンにすれば、航海中に得た成果をまとめるためにいくら時間があっても足りない。結婚し、家族を養うため研究を犠牲にしてまで働く気はなかった。

このころ彼は「結婚の損得表」をメモしている。

ああ、人の全生涯を、ハタラキバチのように、働き働き、その他になにもしないで費やすと考えることは耐えられない。 — 否、否、そうしたくない —。

時間の浪費 — 晩に読書できない — 肥満と怠惰 — 心配と責任 — 書物などのための金の減少 — もしもたくさんの子どもがいたら、どうしてもかせがねばならない。 — (しかし、その場合、あまり働きすぎるのは健康に非常に悪い) たぶん私の妻はロンドンを好まないだろう。そうなると、怠惰な無為なばか者には追放と免職が宣告される — (『ダーウィン自伝』チャールズ・ダーウィン著、八杉龍一、江上生子訳 筑摩書房。この「損得表」は自分のためのメモで飛躍が多い。以下では、読みやすいようにこれを再構成した)。

これに反し、独身を貫けば、自由がある。行きたいと思うところへ行ける自由 — 社交界の選択。そしてそれがわざかですむ。クラブでの賢い人たちとの会話。 — 親戚を訪問しないですむし、さまざまの些事にわづらわされないでよい — 子どものための出費と心配をしないでよい — おそらく口論しないですむ。

しかし、独身もいいことづくめではない。彼は悩む。

足元のふらつく老年になって、友人もなく、冷たく、子供もなく、すでに皺の寄り始めた自分の顔を見つめつつ、孤独の生涯を送ることはできない。

子どもなし、（老後の生活なし）年とてからだれもめんどうをみてくれない——身近な親しい友人たちからの共感なしに仕事してなんの役にたつか——親戚を除いて、老人にとって 身近な親しい友だちがあるだろうか。

結婚生活は安穏をもたらすかもしれないが、一方ではわずらわしい付き合いと時間の浪費がついて回る。しかし老後に待っているのは恐るべき孤独である。いざれかをとるかでダーウィンは逡巡する。研究をとるか家庭をとるか……。彼はゆれ動く。

子ども——（願わくは）——変わることなき伴侶（年とてからは友人）。興味を感じてくれるであろう人、いとしい、楽しませるもの——とにかく犬よりいい——家庭。そして家事のめんどうをみる誰か——音楽と女のおしゃべりとの魅力。これらのものは健康によい。いやおうなしに親類縁者を訪問したま訪問をうけねばならない。だが恐るべき時間の浪費。

人が一日中、煙にまみれて汚いロンドンの家で孤独に暮らすことを想え。ただ、あたたかい暖炉のそばのソファにすわるすてきなやさしい妻と、書物と、そしてぶん音楽とだけを、心に描け——この幻想とグレート・モールバラ街のうすよごれた現実とを比較せよ。結婚——結婚——結婚。

堂々巡りを繰り返した上で最後に彼は、「結婚が必要であることが証明された」と結論づける。

しかし20代の若者にはそれでも確信はなかったのだろう。「気にするな。偶然を信頼しろ（中略）幸福な奴隸だって沢山いるんだ」とみずからを鼓舞している。

こうしてダーウィン青年は迷いに迷った末、「損得表」を書いてからほどなくエマ・ウェッジウッドと婚約し、30歳になる直前（1839年）に結婚した。

恋愛至上主義者からすればダーウィン流のアプローチは、論理的すぎ、冷たい人間と見えるかもしれない。だが、結果としてこの結婚は大成功で、彼は生涯を通じて幸福な結婚生活を送った。

ダーウィン夫人は、夫との信仰上の違いを乗り越え、吐き気、目眩、不眠症に悩まされ長い闘病生活を送ったダーウィンを支えた（彼女は敬虔なキリスト教ユニテリアン派の信者だったが、ダーウィンはおそらく不可知論者だった）。息子たちに宛てて彼は自分の結婚生活を述懐している。

妻こそは私の最大のたまわりものであり、私は一生を通じてこの人から、聞きたくないような言葉をひとことでも聞いたことがなかった。

この人は私の生涯を通じて、私の賢明な助言者であり、快活な慰安者であってくれた。この人がいなかつたら私の生涯は、非常に長い期間、病身のためにみじめなものになってしまっただろう。お母さんは、身近にいる人たちのみんなに愛され賞讃されてきた。

実際、私は家庭にいるときがいちばん幸福だった。子どもであるお前たちはだれ一人として、健康のこと以外では、分秒でも私に心配をかけたことはなかった。五人も息子をもちながら、嘘いつわりなくこう言える父親は、ごくわずかしかいないであろう。

お前たちがみんなそろって、あるいはほとんどみんなが家にいるときほど、私の気にいった集まりなどはなかったし、私は他のどのような社交をもとめたいとも思わなかった。

結婚するかどうかではさんざん迷いぬいたダーウィンであったが、結果的にこの結婚は最善の選択だった。こうも妻に感謝し、家庭を大切にするのは、よほど幸福な結婚であったに違いない。彼はどのような社交より家庭の団らんを楽しんだのである。彼はみずから求めて「幸福な奴隸」となった。

——日々の合理思考——

ダーウィンのこのエピソードは、生きる上で大切なヒントを提供する。

彼は研究生活だけではなく、日常生活でも合理的に考えることを実践した。結婚のような問題については、わたしたちは好きか嫌いかで判断しがちである。そしてひたすらまっすぐ一本道を突き進んでしまう。ちょっと立ち止まって、独身主義と結婚生活の利害得失を比較しようなどとはなかなか思わない。

しかし、人生の折り目折り目、節目節目で合理的に考えるかどうかで、人の一生は大きく変わってくる。身近なこともできるだけ合理的に考えることが大切で、そのような生き方をすればそうでないよりは恐らくうまくいく。

日々の生活で合理的に生きる習慣を身につけてこそ、学問でもビジネスでも合理的に対処することができる。だが、わたしたちはビジネスの場面では合理的に考えようとするが、最も大切な日々の生活を合理的に生きようすることは滅多にない。

やや意外に思えるのだが、合理主義とは「一般に理性を重んじ、生活のあらゆる面で合理性を貫こうとする態度」をいう（広辞苑電子辞書版）。つまり、合理主義は生活のあらゆる面で実践されるものであり、決して学問の世界やビジネスにのみ妥当するものではない。日々の生活の中で実践される合理主義——いわば足元の合理主義——こそ本来の合理主義である。

この点は、モンテーニュもさすがである。彼は日々の生活においてもできるだけ合理的思考を貫こうとした。たとえば、交際についてのモンテーニュの考え方も「超合理的」である。

食事を賑わすためには思慮深い人よりも面白い人を招くに限る。議論の仲間には高潔な人よりも才能ある人を選ぶ。私は目的に合った交際だけをして、それ以上深い付き合いをしない。

私のかかりつけの医者や弁護士がどんな宗派に属していようと、それは私にはどうでもよいことだ。医者や弁護士がその職務を果たしてくれれば、彼らの個人的問題は私と何の関係もない。

彼にとって、日々平穏に暮らすことが人生最大の目的であり、そのためにはあらゆる努力を惜しまなかつた。そのことは、モンテーニュの「私の仕事は生きることだ」の言葉によく表れている。平穏な日々の生活を築くことこそ彼の仕事であり、日常の生活は彼の作品だった。

保苅瑞穂氏は『モンテーニュ私記－よく生き、よく死ぬために』で次のように述べている。

モンテーニュがここで「生活を作る」と言っているのは、そういう身分や財産には直接関係がないことで、ひとことでいえば、われわれが銘々の身の丈に合わせて、身もこころも平穏でいられる日常の生活を作るということである。

これはモンテーニュでなくとも、まともな人間なら誰でもが生きて行く上で目指すはずの平凡とも基本とも言えることである。

しかし、その上でかれがその平凡、あるいは基本とも言える生活を築くためにいつさいの努力を傾けてと言っているところに、かれがその生活を築くのにどんな姿勢で臨んだかが端的に示されている。

時代の状況が戦乱だらうと平和だらうと、生活を作るにはそれだけの精神的努力が実際に必要であり、また時代がどうだらうとつねに必要なことである。

かれは平穏に、自由に暮らすことが何よりの望みだと何度も繰り返して『エセ一』のなかで言っているが、その望みは、それが平和な時代のことであっても、待っていて叶うような筋のものではなかった。

キラキラした、名声や栄誉に囲まれた人生より、自由で、平穏な人生を送ることこそがモンテーニュの目標だった。そのためには身近な問題を合理的に考えることが大切だし、そうすれば結果として豊かな人生を楽しめる確率は高くなる。

—「手」で考える—

とはいって、若いときはわたしも — というより50代近くになるまで — 日々の生活を合理的に規律しようと、意識的に考えたこともなかった。

20代半ばにわたしは5年間勤めた会社を辞め、大学院へ進もうと決心した。今から30数年前のことである。終身雇用が当たり前だった当時では、会社を辞めるのはサラリーマンの「キャリア」を失うのと同義であった。

そのように重大な決断だったが、辞表を出したのは時の勢いのようなもので合理的に考えて辞めたわけではない。将来への閉塞感、人間関係のストレス、現実が自分の思い通りにならない焦燥感などが相まって、鬱屈がマグマのようにたまっていた。一流企業での安定的な生活が約束されているのに、自由で独立した生き方をしたいという青春の客気に突き動かされた。当時のわたしには、サラリーマン生活を続けた場合と辞めた場合の得失を比較するという発想すらなかった。

しかし、これはわたしだけではないようである。周囲を見渡しても、私生活を合理的に規律している人は滅多にはお目にかかるない。ビジネスでは合理的判断をしていても、私生活では感覚的に行動しているのが多くの人の実態である。

では、生活の隅々まで合理主義を実践するためにはどうすればよいだろうか？

わたしの経験では、そのための最も有効なツールは、頭の中で考えるだけではなく、メモをとることである。頭の中で考えることは圧倒的に感情に影響されるものであり、しばしば堂々巡りを繰り返す。頭の中で考えることは論理一貫しないことがほとんどである。

できるだけ感情の影響を排し、理性的に考えるために一旦自分の想念をメモに記し、客観化することが必須である。

ダーウィンの例に見られるように、メモは書き散らかしでも、断片でも構わない。

頭の中で考えているうちは首尾一貫しているように思っても、メモを取ってみると雑念にすぎないことに気づくことが多い。それはそれでいい。自分の想念が圧倒的に感情的に影響され、合理的な思考からほど遠いということを認識するだけで、二歩三歩前進である。

このように、考えるという行為は必ず書くという行為を伴わなければ、思考として結実しない。わたしたちは頭で考えるのではなく「手で考える」のである。（続く）